

吉野復興大臣岩手県訪問ぶら下がり会見録

(平成30年1月20日(土) 15:31～15:45 於) 岩手県陸前高田市)

1. 発言要旨

こんにちは。今日は大船渡市と陸前高田市を訪問いたしました。

大船渡市では、かもめテラスを伺いました。「かもめの玉子」で有名な、さいとう製菓さんの店舗でございます。アバッセたかたにも、お店が出ております。

このかもめテラスは、観光拠点としても多くの方が来ていただいています、本当ににぎわいをつくっていただいています。私も「かもめの玉子」をデコレーションする体験コーナーで学ばせていただきましたけど、大変楽しい、特に、子供さんたちにとっては大変楽しい体験コーナーでございました。

次に、鎌田水産に伺いました。まだ稼働はしておりませんが、新しい工場の見学をさせていただき、漁業・水産加工業の現状についてお話を伺ったところです。

ここは漁業だけではなくて、いわゆる六次化、加工業にも取り組んでいるところでございますので、主力はサンマを使った水産加工業、本当に大きく取り組んでいる姿を拝見させていただきました。

その後、ここ陸前高田市を訪問しまして、本当に高い防潮堤を視察をさせていただきました。被害の甚大さを改めて感じる事ができたわけであります。

また、防潮堤が命と暮らしを守る重要な役割を果たしている、このことに感動をしたわけであります。

最後にここ、アバッセたかたと市立図書館を訪問させていただきました。市街地の拠点施設として、多くの方々にお越しをいただいております。大変嬉しく感じたところです。これらの施設が核となって、町の再生が着実に進んでいくことを楽しみにしております。

また、図書館でありますけど、地元のカラマツを使ったすばらしい施設でありまして、特に、東日本大震災の特別のコーナーを、震災関連の図書を取り扱ったコーナーがございました。

将来、東日本大震災の研究者がこの資料を使って本当に東日本大震災をきちんと分析できるよう、あらゆる本がそろっているところでございますので、そういう研究施設としても大いに役立つコーナーなのかな、こんなことで風化をさせないという意味での市の取組が本当に偉いな、こういう気持ちを持った次第であります。

以上です。

２．質疑応答

（問）吉野大臣は今回、こちらのアバッセは初めてでございますか。

（答）ええ。中に入ったのは初めてですね。前回来たときに建物、外からは見させていただきましたが。

（問）どうですか。中の様子、人のにぎわい、御覧いただいた中で。

（答）すごいです、たくさんの方々に参加していただいて、にぎわいをつくっておりますので、スポーツ施設から、エステから、介護施設もございますので、ここに来れば何でもある、そういう意味で、多くの市民の方々が集まっているのかな、すばらしい拠点施設をつくったんだな、これが復興の第一歩になるんだな、こんな思いをしております。

（問）全体的な質問をちょっとさせていただきたいと思うんですが、震災からもうすぐ７年が経ちます。復興をどのように進めていきたいという決意か意気込みをひとつお願いします。

（答）復興庁はあと３年で自動的になくなるわけですけど、あと３年ということ踏まえて、まず、ハード事業、これは必ず終わらせる、完成させるという決意を今日、ここを訪れて新たにしたいわけがあります。

特に、この陸前高田市はまだまだこれからやらねばならないことがたくさんございますので、あと３年でどうすれば完成させることができるか、そういう意味で、日々やっているんですけど、改めて工程表の見直しというところから始まって、どうすれば３年以内にハード事業を終わらせられるか、これは人のいろんな協議もございますから、そっちの方に取り組んでいきたい、このように考えています。

（問）大臣、新年度予算等の作成に当たっても、心のケアが非常に重要だというお話をされていたと思います。

陸前高田市の方では「思い出の品」という、がれきの中から見付かった写真や絵とかその人、その人にすごい思い出があるようなものをずっと返還作業を続けていたんですけども、去年の１１月をもって、予算の問題もあって一時終了になったということがございまして、心のケアということで復興事業、予算を要望もしたんですけども、それが認められなかったという経緯もあるようなんです。心のケアという面で、震災から７年を過ぎて今、ようやくそういう思い出に向き合えるという方も出てきているということもある中で、その思い出の事業をまた再開するに当たって、復興庁として何かしらの手立てを考えたり、お考えはあるのかをお聞かせください。

（答）今年の３月で丸７年、そして８年目を迎えます。私も津波の被

災者の一人なんですけど、去年辺りから実は津波の映像を見たくないんです、私が。テレビのチャンネル、切り替えてしまうんです。ですから、私が津波の映像を見たくないんだから、誰も言いませんけど、津波で被害に遭った方々はそういう心のケアを必要とする事態になっているんだと。私自身の体験から、私が大臣になってから心のケア、心の復興の方に、ハードからソフトへという復興庁の事業を大きくハンドルを切ったところなんです。

月命日の１１日には、岩手県警も、宮城県警も、福島県警も行方不明になった方々の捜索をしております。と同時に、そのいわゆる「思い出の品」、全く関係のない方にとっては何の価値もない、単なるごみかもしれませんが、関係する方々にとっては本当に宝物でございますので、そういうところも収集をしているところでございます。

その事業が今回、予算的な面で打ち切られたということであれば、再度検討していきたい、このように考えています。

(問) 本日、御視察された防潮堤の近くに、赤いガソリンスタンドの看板があって、水位の高さを示しているものがあるんですけども、国道のかさ上げ工事によって撤去されるという見通しになっていまして、そうして、震災の記憶を伝えるものが少なくなっていくというのも一つの問題であるのかなと思うんですが、大臣は震災の記憶を伝えていくということに対して、どのように課題をお感じになられていて、その看板の撤去についてどのように御所感をお持ちかということ。

(答) 看板のみならず、震災遺構として後世の方々に伝えていきたいもの、一本松もしかり、その後ろにあるユースホステルの本当に生々しいものもしかり、これは市長さんおられますから、それは地元の方が、きちんとこれは残しておきたい、また、これは壊して新しいものにしたいということでございますので、これは地元の意見を最大限これから私は尊重していきたい、このように考えています。

(問) 心のケアに関しての話なんですけれども、先日、阪神淡路大震災の発生から２３年が経過したんですけれども、それでも阪神淡路の被災地の方々は、今もなお悲しみを抱えていらっしゃる方もいらっしゃるというふうに伺っております。

そんな中で、心のケアというのは本当に長く時間の掛かる問題だと考えているんですけれども、やはりどうしても傾聴活動だとかそういった活動に対しての予算というのは、取りにくくなっているというふうにも伺っております。

３２年度を越えると復興庁もなくなってしまうわけなんですけれども、継続的に被災した方々の心をケアしていくということにつ

いて、何かこんな取組ができるんじゃないだろうかとか、お考えになっていることがもしあれば、教えていただけますか。

(答) いわゆるソフト事業、心のケア、心の復興事業で、予算が減っているということではありません。必要な予算を獲得しております。

特に、支援をしているNPO等々の支援者の方々に対して、支援者の支援という新しい事業も30年度につくらさせていただきました。この予算を計上させていただきました。

そういう意味では、復興庁はあと3年で終わりますけど、私もいろんなところ歩いておりますので、おっしゃるとおり、長い年月が掛かるんだなということは、これは現場を歩いてみてよく理解をしております。

ですから、復興庁がなくなった後でも、そういうものが継続して支援できるような道筋、私が大臣やっている間には何とか道筋を付けていきたいな、こんなふうに思っています。それは現場歩いた私の感想なんです。

どうもありがとうございました。

(以 上)